

元文部科学大臣・元参議院自由民主党幹事長 小坂憲次先生の告別式にあたり、三十年近くにわたってご厚誼を賜った者として、お別れの言葉を申し述べます。

「議員はやめても、政治を引退することはない。病に打ち勝ち、必ず戻ってくる」

さる五月三十日、与野党問わず、驚くほど多くの国会議員や関係者が集まって都内のホテルで開かれた「小坂憲次議員に感謝をする集い」で先生はそう力強く仰った。その言葉を信じ、幾多の困難を克服された強靱な精神力で病を克服され、またご一緒に政治活動が出来る日が来ることを心から願っていた。あれからまだ五か月も経っていない今日、その思いも叶わず、こうして先生のご遺影の前でお別れの言葉を述べねばならないことが、悲しく、悔しくてたまらない。あまりに早すぎるご逝去を、私はまだ現実のものとして受け入れられないままに、ここに立っている。

先生との思い出は尽きることが無い。

平成二十年八月、福田康夫総理総裁が退陣を表明され、突如として総裁選挙が行われることとなった際、自主投票を決めた当時の津島派の中にあつて、独自候補を擁立すべきとの声が若手を中心に高まり、小坂先生と私の名が挙げられ、連日連夜にわたって議論が繰り返された。

「高校、大学の先輩であり、名門政治家の家系である小坂さんこそ相応しい」と言う私と「政治の世界ではやはり議歴が大事なのだから、石破さんが出るべきだ」と言う先生との間で話は平行線を辿り、結局私が負けを覚悟で出馬することとなったのだが、もしあの時先生が出られていたら、その後の日本も、先生の政治家人生も全く異なったものになったに違いない。あの総裁選では選挙責任者をお勤めくださり、私が選挙事務所に帰るまで、何時ま

でもも待っていて下さった。そのお心に、疲労困憊し挫けそうになっていた私はどれだけ救われたか知れない。

私にとって先生は憧れの人であった。迷い、揺れ動いてばかりいる私とは異なり、いつも一本筋が通っていた。先生が私より一期遅く、平成二年に議席を得られ、初めてお目にかかったその日から今日に至るまで、それはずっと変わることなく続いていた。

お互いに政治改革に邁進した若き日々のごことは決して忘れることが無い。自民党同士が競い合う中選挙区制である限り、カネはかかり、国家の利益よりも地域の利益が優先する。知名度も、選挙民に対する信用も親のおかげで既に得られているが故に、候補として我々が出ている。二世・三世、位を極めた官僚、資産家、知名人でなくとも、意欲と見識のある人であれば、党が全面的にバックアップするという制度は小選挙区制しかない、二世でなくとも出られる制度を作ることには我々世襲議員の仕事なのだ、我々は純粋にそう信じていた。選挙制度改革に名を借りた権力闘争の面があったのはその後の歴史が証明するところであるが、そのように考えたことは一度もなかった先生と私は、細川政権が誕生し、多くの仲間たちが自民党を離党して去って行った時、しばし呆然としたものだった。

政治は現実であり、利害を調整する営みである。しかし同時に理想や夢を実現するための手段でもあり、それを失った時、政治は人々の支持を失う。先生はそう思っておられたのではないだろうか。

参議院に転じられてからも、その姿勢は変わることがなかった。自民党参議院幹事長に就任され、二院制の意義に立脚して権力とは一線を描く、良識の府としての参議院の実現に情熱を傾け、憲法審査会長として主権国家に相応しい憲法の改正に力を尽くされた。いずれも志半ばではあったが、先生

の思いは多くの人々の共感を呼んだ。

先生の政治姿勢に対しては、時には批判や冷笑が寄せられることもあった。しかし私は、ずっとそのような先生に憧れ、政治家はあのようにありたいと思ってきた。

先生は今年四月八日の永年在職議員表彰の謝辞の中で、

「今日振り返れば、実現した選挙制度や国会改革は、法案成立の為に妥協せざるを得なかった現実の前で、当時議論していた形とは異なったものになった」

「政治とカネの問題や世界で果たすべき役割についても、更に与野党の議論と国民の理解を得る努力が求められている。これらの問題への取り組みを考える時、忸怩たる思いであり、議員として至らなさを恥じるばかりである」と述べられた。政府控室でこれを院内中継で聞いていた私は、先生と共に戦ってきた二十五年の日々の様々な場面が脳裏に去来し、胸が一杯になって「すごく良かった、心に沁みた」とのメールを先生に送ったのだった。

先生は政治家として常に真摯に、精一杯、時に挫折し、絶望の淵にありながらも常にそれを乗り越えてその人生を全うされた。教育基本法の改正案の提出、対地雷廃絶条約の批准、食育基本法の制定。文部科学大臣をはじめとして数々の要職を務め、輝かしい功績を遺された。いつも先生の念頭にあったのは己の栄光ではなく、一人一人の悩み、苦しむ人々の姿であった。

ご家族にとっても「素敵なお父さん」であった小坂先生。羨ましいほど仲の良い、明るくて賑やかなご家族だった。「小坂さんはJALのパイロット、奥様はCAさんだった」との噂があったほどの美男・美女の素敵なお夫婦で、献身的に先生を支えられた、まり子夫人。ごくたまに女性のいるバーにご一緒しても、先生はすぐに眠ってしまわれていたが、「よほど奥様が大好きなのだろうな」と同僚議員たちと話したものだ。先生のお心そのままに立

派な社会人として活躍中のご長男の幸太郎さん。先生のスタイリストとして常に気を配り、実は勝負事が大好きだった先生の病床で花札のお相手をされ、先生がとても可愛がっておられたご長女の英子さん。どうか天上にあって、最愛のご家族にご加護を賜りますように。

「人が一生を終えた後に残るものは、その人が集めたものではなく、その人が与えたものである」

フランスの哲学者、ジェラルド・シャンドリの言葉と伝えられる。まさしくこの言葉通りのご生涯であったし、同じ思いを持たれる方はさだめし多かろうと思う。何故私のような至らぬ者に先生はお心をかけて下さったのか、今もわからない。何一つお返しは出来なかったし、怠惰で臆病な私は、先生が議員を退かれた後、お見舞いに伺うこともしないままに先生のご遺体と対面することとなった。「ご負担になってはいけない、少しお元気になられてから行こう」などと思わなければよかった。いくら悔やんでも、取り返しはつかない。

「石破さん、そんなことはいいいんだよ。頑張れよ、何処にいたって応援しているよ」

そんなお声が今も聞こえてくるように思われてならない。無条件に自分を受け入れて下さる、数少ない人の一人を失ったことの悲しみは、これから日が経つにつれて深まるように思われる。

頭脳明晰にして眉目秀麗、信義に厚く、真に優しい心をもって人に接し、友情を重んじた小坂憲次先生。高い理想を掲げ、困難に決して屈することなく、広い国際的な視野に立って、祖国日本と、一人一人の国民のために尽くされた小坂憲次先生。情熱と信念に満ちた演説で、人々を魅了してやまなかった小坂憲次先生。中央においても、地元・長野にあっても、大勢の人々が

慕い、大好きだった小坂憲次先生。

先生とお会いし、政治を語り、行動する日々をともにできたことは、私の生涯の誇りであります。真に素晴らしい人であり、政治家であり、友人でありました。

長きにわたって公私ともに賜りました言葉に尽くせぬご厚情に深謝し、ご功績を称え、御霊の安らかならんことを希い、お別れの言葉と致します。

平成二十八年十月二十六日

友人 衆議院議員 石破 茂